旧渋沢家住宅の変遷 2

国有化、そして再び江東区へ

終戦直後、大蔵大臣に就任した敬三は、財産税を導入すると、昭和21年（1946）に自らもその支払いとして三田綱町の住宅を国に物納しました。以後、建物は、大蔵大臣公邸、三田共用会議所など国の施設として使用されました。

そのような中、以前渋沢家の執事を務めていた杉本行雄（すぎもとゆきお）は、建物の払い下げを願い出ていました。杉本は、敬三の指示によって渋沢農場のあった青森県に移住していましたが、「現状のまま保存」を条件として建物が払い下げられると、平成3年（1991）に青森県六戸町（ろくのへまち）の自身が経営する古牧（こまき）温泉敷地内へ移築しました。その後、平成30年（2018）、建物は清水建設株式会社の所有となりました。今後、江東区潮見（しおみ）に移築される予定です。

青森県六戸町時代の旧渋沢家住宅　右端が「表座敷」
（清水建設株式会社所蔵）

このように、旧渋沢家住宅は何度かの移築と増改築を経ながらも、その中心には明治11年（1878）に建てられた「表座敷」がありました。その建物は、当初の形態や工法などがよく保存され、築後140年余を経ても当時の姿をよく留めています。その「表座敷」とともに構成される住宅は、和風と洋風とを巧みに調和させた設計と施工技術、および意匠・用材の優秀さを備え、昭和初期の近代住宅の姿を今日に伝えています。